

令和7年9月30日発行



五小だより

学校だより 10月号

東久留米市立第五小学校

校長 古矢 美雪



世界とつながる

副校長 新野 妙子

朝夕の風に秋の気配が感じられるようになりました。さわやかな風に吹かれながら、子どもたちは元気いっぱい活動しています。照り付けるような夏の暑さは過ぎ去っていきましたが、9月に開催された「世界陸上」の余韻はまだ残っているのではないのでしょうか。

今回は、「東京2025世界陸上」として9月13日に開幕し、9日間熱い闘いが繰り広げられました。東京で世界陸上が開催されるのは、1991年ぶりとなりました。世界のトップアスリート約2000名が国立競技場に集い、それぞれの種目の頂点をかけて闘う姿は、応援する人たちを魅了しました。

男子110mハードル決勝では、村竹ラシッド選手が13秒18でフィニッシュし、5位入賞を果たしました。これは日本人選手として最高の成績です。しかし、本人は「何が足りなかったんだろう…」と涙ながらに語り、表彰台に届かなかった悔しさをにじませました。パリ五輪でも5位に入賞していた村竹選手は、世界陸上までの1年間、「本気でメダルを取りに必死に練習してきた」と語り、そのチャレンジ精神と努力の姿勢が多くの人々から称賛されました。

カザフスタンのジェプケメイ選手は、女子3000m障害の予選中、後方の選手にかかとを踏まれ、右足のスパイクが脱げるというアクシデントに見舞われました。それでもジェプケメイ選手はレースを止めず、はだしのまま水濠に飛び込み、驚異的な走りを見せました。靴のトラブルにもかかわらず裸足でレースを完走した姿は「諦めない心」の象徴として世界中で話題になりました。世界陸上を通じて、日本をはじめ各国の選手たちが互いの健闘を称え合い、文化や習慣の違いを超えて認め合う姿は、スポーツがもたらす希望とつながりを強く感じさせてくれました。

さて、9月に6年生が外国語の授業の中で、韓国のチドン小学校の6年生とオンラインで交流する機会がありました。チドン小学校との交流では、本校の6年生が、授業の中で学習した英語のフレーズを使って、東京をはじめとした都道府県のよいところを紹介しました。発表の終わりに韓国語で挨拶をすると、チドン小学校の児童が喜んでる姿や拍手をしている様子が写しだされました。一方、チドン小学校の6年生は、人気の教科やクラブ、伝統料理などを英語で紹介しました。発表の終わりには、日本語で挨拶をしてくれ、五小の児童も感激していました。オンラインでの交流でしたが、互いの国の良さや学校の様子を知ることができました。

私が、今から十数年前にこの活動に参加したときには、まだ、手紙でのやり取りが主流でした。その際は、手紙が届くまでに3か月かかったことを思うと、教育現場でも急速にインターネット環境が整い、日本にいながら、世界の人とつながることができるようになり、国際的な交流が進んできたと感じます。人と人との交流を通して、相手の国の文化や習慣、芸術などに触れることで、互いの良さを見つけ、互いの国を大切にす気持ちが増えてほしいです。

スマートフォンやタブレットなどの通信機器が発達することで、人と人とが繋がりがやすくなった反面、個人情報の取り扱いには、十分留意しなければいけません。本校でも、以下の点について職員で確認し、事故防止に努めてまいります。

- ・私物のパソコンやタブレット、スマートフォンなどを教育活動には使用せず、児童の写真や動画を撮ることはしない。原則、教室には、持ち込まない。
- ・児童を撮影する際は、学校所有のカメラを使用する。撮影したデータは、カメラのメモリに保存したままにせず、フォルダに保存するか、データを削除して、持ち運ばない

心配なことがございましたら、すぐにご相談ください。今後ともよろしくお願いたします。